

「木育」を通じた持続可能な地域社会づくり

木育(もくいく)で全ての人が「木とふれあい、木に学び、木と生きる」。
おもちゃと遊びで人と人をつなぐ。

認定 NPO 法人 芸術と遊び創造協会

高野祥代

東京おもちゃ美術館

現在の東京おもちゃ美術館の前身となる「おもちゃ美術館」は、1984年東京都中野区に開館した。初代館長の言葉「人間が初めて出会う芸術は、おもちゃである」をフィロソフィーに掲げ、おもちゃと遊びで人と人をつなぐ体験型美術館である。2008年には、新宿区にある旧四谷第四小学校の廃校あとへ移転、校舎の面影を残しながら内装工事を施し、東京おもちゃ美術館として生まれ変わった。国産の木材を多く使い、日本国内の木工職人・おもちゃ作家の作品を取り入れた空間は、年間14万人の来館者を迎える空間へと成長している。一般的に博物館や美術館に所属する「学芸員」とは異なる、おもちゃ美術館独自の制度として、「おもちゃ学芸員」と呼ばれるボランティアスタッフが300人超活動している。住民の社会参画の仕組みと共に運営されている当館は、まちづくりの視点で評価いただくとともに、国産材の木製おもちゃや木質化された空間をきっかけに木育の視点でも高く評価されるようになった(令和2年度ふるさとづくり大賞 総務大臣表彰、ウッドデザイン賞 2015 優秀賞(林野庁長官賞)受賞など)。



東京おもちゃ美術館の赤ちゃん木育ひろば

木が好きな人を育てる

「木育^{もくいく}」という言葉を初めて目にする方も多いかもしれない。木育とは、子どもをはじめとする全ての人が「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みを指す。2004年に北海道庁主導のプロジェクトで誕生した言葉で、2006年に閣議決定された林野庁「森林・林業基本計画」の中でも採用された。以降、活動も多様化し様々な定義があるが、私たちは「木が好きな人を育てる活動」と考えている。

「木育」が生まれる背景には、森林環境にまつわる社会的背景があった。国土の約3分の2を森林で覆われた日本は、世界有数の森林大国。しかし、約20年前、木材の自給率は極めて低く、国産材が使われないために、森の管理ができずに荒廃しつつあった(※木材自給率は、2002年が過去最低値の18.8%、21年には41.1%にまで改善)。木材利用が進まない当時の社会的状況の中、私たちは2010年に林野庁補助事業を受託し、木育に本格的に取り組み始めた。その中核が、ウッドスタート事業である。本事業の具体的なアクションに、地元の木工職人が、地域材で制作した木のおもちゃを赤ちゃんに贈る「誕生祝い品」事業がある。玩具に関する知見を生かし、それぞれの地域の「宝」をモチーフにした、当館監修のオリジナル木製玩具が新生児へ配られるもので、自治体を中心に企業などによって進められている。本取り組みに賛同し参画するウッドスタート宣言自治体は2023年7月現在、全国